

## 戦前生まれのクラブと横浜クラブ 横浜クラブの創立 80 周年記念例会 戦前生まれのクラブ、それぞれ 国際協会脱退と復帰 横浜クラブの場合

2010年12月25日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

### 横浜クラブの創立 80 周年記念例会

日本で\*3 番目、東日本区では最初にチャーターされた横浜クラブの創立 80 周年記念礼拝・例会が、12 月 11 日午後、横浜市関内の横浜 YMCA で行われました。

記念礼拝と記念例会が、午後 3 時から 5 時まで行われ、その後は、ロビーでの懇談のひとつときがありました。会の模様は、横浜クラブのブリテンをはじめ、さまざまに報じられるでしょう。

今回は、横浜国際大会の後ということで、参加者の負担を考慮して、会場は YMCA の施設を利用して、会費なしで、区役員、湘南・沖縄部のクラブ会員、関係者を中心に案内がなされました。約 80 人が集い、参加者全員が紹介されるなど、終始なごやかな、感謝と祝福の時となりました。

希望者は、会費制で中華街において会食と、今の時勢に合った、スマートな企画でした。カラー印刷の『創立 80 周年記念誌』も発行されました。

\*日本で 3 番目というのは、1930 年 4 月に国際加盟したソウルの日本人 YMCA に設立された京城クラブを数えていません。

### 日本区 3 番目のクラブとして

1927 年に渡米した大阪 YMCA 奈良傳主事は、ワイズメンズクラブ国際協会のヘンリー・D・グライムズ (Henry D. Grimes) 国際書記長に日本の 6 大都市にワイズメンズクラブを設立することを約束しました。当時、2 人は 32 歳でした。

1927 年に大阪クラブを設立した奈良主事は、当然、横浜 YMCA にもクラブ設立を呼び掛けました。村上正次総主事の理解もあり、主事もメンバー獲得に動きまわりました。しかし、1923 年に襲っ

た関東大震災は、相模湾北西部を震源としただけに、横浜市の被害は甚大でした。7 年前に落成した YMCA 会館は、外壁を残して焼失。YMCA は、救護活動の継続とともに、自らの再興に懸命で、クラブづくりは遅れました。

1930 年 12 月 15 日、横浜クラブは、大阪クラブのスポンサーによって、国際加盟を果たしました。会員は 18 人、会長は山越正勝でした。

市民ために音楽評論家を招いてのレコードコンサートを行い、1934 年の横浜 YMCA 50 周年記念募金活動では、中心的に活躍しました。残念ながら、それ以上の当時の記録は失われています。

### 戦前生まれのクラブ

横浜クラブと同じ時期に誕生し、厳しい時代を背負ったクラブがあります。

1928 年 11 月 10 日付で、すでに 1926 年から活動していた大阪 Y クラブが改組して、大阪クラブ (代表・姉川四十二) として国際加盟。日本初のワイズメンズクラブとなりました。会員は 26 人でした。

1929 年 2 月 15 日、仙台クラブ (会長・鈴木愿太) の設立が仙台 YMCA の常務理事会で承認されました。後述のような活動をしましたが、国際加盟は、戦後になりました。

1930 年 4 月 8 日、京城クラブ (代表・笠谷保太郎主事) のチャーターナイトが行われました。当時、活動した 18 人ほどの名が記録されています。『HISTORY OF Y'SDOM』(1972 年)によれば、1941 年に休止状態になっています。

1930 年 6 月 10 日、神戸クラブ (代表・越智勇)

が認証状伝達式を行いました。会員 23 人でした。

1930 年 12 月 15 日、横浜クラブが前述のように国際加盟しました。

1931 年 2 月、前年から例会をもっていた京都クラブ(代表・山本一清)が、奈良傳主事を迎えて結成例会を開きました。「大いにやるが、国際協会に加盟せず」との方針で、京阪神連合例会に参加するなど、国内クラブとの交流は行いましたが、国際加盟は、戦後になってからです。

1931 年 6 月 9 日、東京クラブ(会長・堀豊太郎)が認証状伝達式(認証は 2 月 6 日)を開催。会員 17 人でした。

1940 年 3 月 26 日、1939 年に中国に渡った奈良傳は、北京聯青会(中国語の聯青社がヒント)を結成しました。

名古屋クラブは、「設立を目指したが 1938 年に未結成に終わる」と報告されています。

『昭和の東京 YMCA』(木本茂三郎 東京 YMCA 1966 年)は、1943 年頃、南京に「聯青会の名でワイズメンズクラブができていた」と記していますが、詳細は不明です。

仙台クラブについては、仙台 YMCA の高松成士主事が、同 YMCA の機関紙『仙台青年』に資料をまとめています。『日本ワイズメン運動 70 年史』(1997 年)に記載できなかった事実を一部ここで紹介します。

仙台 YMCA の羽田宗平主事が、米国視察旅行から帰国して間もない 1929 年 1 月から、クラブ設立の準備会を開始しました。2 月 15 日に仙台 YMCA 常務理事会で設立を承認、3 月 17 日に、クラブ主催の午餐会が開かれました。

この時期に記録に残る会員は、27 人。YMCA の理事、監事とともに YMCA 会員 200 人を募集するキャンペーン、『仙台青年』の責任編集、YMCA の各委員会、各行事の中心的な存在となるなど、羽田主事の強力な応援部隊となりました。5 年間で約 40 回の例会を行いました。1934 年 7 月をもって、『仙台青年』から活動報告が消えているようです。

日本のワイズメンズクラブの草創期において興味深いことは、1927 年に大阪 YMCA の奈良傳主事、1928 年に神戸 YMCA の本城敬三主事と、仙台 YMCA の羽田宗平主事とが、ほぼ同時期に相次いで渡米して、YMCA を支援するワイズメンズクラブに出会い、帰国してクラブをつくっていることです。

## 満州事変から 15 年戦争へ

昭和初期、日本にワイズメンズクラブが誕生した時期からファシズムの台頭が目立ってきました。ワイズメンが集っては、何かおかしいと言っている間に、集会や言論は制約されてきました。1931 年、それは、中国北東部・柳条湖での 1 発の銃声から始まりました。戦火は、満州事変から日中戦争、徴兵、非常事態宣言、国家総動員令と、国民生活はもちろん、ワイズ運動をじわじわと締め付けてきました。日本軍の武力行使に対する中国ワイズメンの抗議を国際協会が取り上げ、日本のワイズメンの考えと対応を問う文書のやりとりもありました。

日本が国際組織と関係をもつことが困難になってきました。時の五十嵐丈夫区理事(東京)は、組織を維持するためには国際協会から脱退する以外はないと判断し、自らは、国際協会理事を辞任し、同時に、全クラブが脱退することを決めました。

この時期を、『HISTORY OF Y'SDOM』(1945 年版)は、1941 年初め、奈良傳は、1941 年 1 月と記しています。また、五十嵐丈夫伝『小さくとも光になりたい』(日本クリーニング新聞社 1993 年)は「日米開戦の 2 カ月前」(すなわち 10 月)としています。これは、脱退後の 10 月 26 日に、組織温存のために日本ワイズメン連盟の結成を決めた宝塚ホテルでの全国協議会のことでしょう。クラブ名を聯青会とすることも可、という取り決めをここでしています。

『HISTORY OF Y'SDOM』(1972 年)によりますと、日本区・五十嵐区理事から、「1940 年度の

活動報告はあったが、以後、報告は絶えた」と記しています。米国からの五十嵐区理事宛ての来信はすべて開封されていました。

国際協会に対して、脱退をどのように連絡したかは、区には記録がありません。脱退に触れた文献はいくつかありますが、内容はほぼ同じです。最も古い『HISTORY OF YSDOM』(1945年)をコピーしたものでしょう。そこには、「区理事は、自身の役割から退き、当分の間は、日本のクラブが国際協会から脱退することを勧めた」と記されています。

### 離脱後から自然休会まで

全国協議会で脱退後の対応を協議した全国協議会から43日後、日米開戦となりました。脱退はしても、休会はしまいという決意でしたが、国が戦争となれば、大きな枠組みに取り込まれ、流れに逆らうことはできなくなってきました。

1943年頃までは、なんとか例会を行っていましたが、召集、疎開などにより、メンバーが離散、空襲などで夜間外出も困難、YMCA会館も国策会社に使用されるなど、例会が成り立たなくなり、自然休会に追い込まれてしまいました。

1940年に東京クラブが、休会中の横浜クラブを励ます会を行ったと記録されています。このあたりで横浜クラブは活動が中止した模様です。

### 戦後の復帰

1945年8月の敗戦の2カ月後、最後の外交官交換船で帰国していたラッセル・L・ダーギン(Russell L. Durgin)主事が、米国外交特使の青少年運動特別顧問として来日、日本のワイズメン、YMCAを元気づけました。ワイズメンがクラブ再興のために、各地で集会を持ち始めたころ、国際では、思いがけない動きがありました。

1946年8月、米国ブラッドフォードで、前年から延期された第22回国際大会が開かれました。ここで、戦中、日本と交戦国であった中国代表の「速やかに日本のクラブを国際協会に迎えよう」という提案が、感動の拍手の中で承認されたので

す。そのことを日本は知りませんでした。ここで日本の復帰が認められ、国際大会に招待されることになりました。

しかし、国際協会が復帰を認めても、国際大会への参加を、連合国軍総司令部は認可しませんでした。他の多くの国際的な団体が、日本の国際復帰を認めていなかった頃です。

日本は、1948年のローマ・オリンピック大会には、ドイツとともに戦争責任を問われ、参加が認められませんでした。1947年7月、オスロで開かれた世界YMCA大会の場合でも、ダーギン主事の必死の要求にもかかわらず、日本の参加は認められず、ダーギンは抗議のために羽織袴の姿で開会式に参加して、参加者を驚かせたという挿話があります。そういう時代だったのです。

1947年1月、前年、北京から引き揚げた奈良傳は、大阪YMCA総主事に就任しました。留守中に自宅が空襲で焼失していたため、京都に仮住まいをしていました。4月の第1回参議院選挙の投票に家に戻った彼は、前国際事業主任・\*カール・バークストローム(Carl Bergstrom)と偶然、出会いました。彼は、米軍軍政部教育部長として釜山に駐留していましたが、休暇をとり、グライムズ国際書記長の書簡を持って来日したのです。

奈良とともに京阪神のYMCAを訪ね、ワイズメンと会合を持ち、その後、彼は、ひとりで広島、福岡、大牟田、名古屋、東京を訪問しました。東京では連合国軍総司令部に交渉して、日本のワイズメンズクラブの国際復帰の特別許可を取り付けて韓国に戻りました。

この年は国際協会25周年記念の大会が、ワイズメンズクラブ発祥の地、トレドで開催されました。日本は、占領軍の出国許可が下りず、参加できませんでした。そこで、バークストロームが、「爆撃を受けて壊滅した、焦土の町、貧困と飢えとぼろ切れの中で忍耐と不屈の精神で愛を示して立ち上がった日本のワイズメンについて」報告しました。それが、翌1948年の奈良区理事のロングビーチ国際大会の参加へと繋がるのです。

\*パークストロームは、国際青年奉仕事業主任を5年間務めました。軍務で駐留した釜山に、YMCAを設立し、ワイズメンズクラブの設立を指導して、韓国ワイズダム之父とされています。

## 2 度目の国際加盟？

私たちは、組織からの脱退というと、1933年の「国際連盟脱退」の情景を思い浮かべますが、国際では、日本区を休会扱いにしていたようです。復帰をRenewed(更新)としています。

戦前に加盟していた大阪・神戸・横浜・東京クラブは復帰、京都・仙台クラブは、新たに加盟申請をすることになりました。

ところが、横浜クラブだけは、別の道を選択しました。このことについて、『横浜ワイズメンクラブ40年史』(1971年)の祝辞に、奈良傳は、「戦後、横浜の様相が変わり、戦前の会員を容易に集めることはできず、結局、新設クラブとして、まったく新しく出発したいというのが横浜クラブの意向だったので、奈良傳理事もこれを尊重し、改めて加盟を申し込み、1948年11月3日付で2度目の加入をしたわけである」と書いています。

横浜は、太平洋戦争で大きな打撃を受けました。YMCA会館は、空襲による被災を免れたものの、米軍に接收され、1949年に一部返還されるまで、中区山下町吉浜橋の港中学校の校舎の一部を借用して活動を行っていました。戦中・戦後の混乱時期、人の流動の激しい横浜での10年の空白は大きく、戦前のメンバーが集まりませんでした。

結局、旧メンバーは、海老澤廉総主事(戦前は担当主事)だけでした。しかし、横浜市の実業家を22人集めて、新クラブとして、再スタートをしました。この22人は、まさに侍揃いだったと言われています。会長は小原啓士。

このことが、「2度の国際加盟」といわれているのです。

この新たな再加盟については、不可解な点があります。

どうして、横浜クラブという同じクラブ名で認証されたのかということです。クラブが解

散した場合、同一クラブ名では加盟できないという指導があるのです。1975年に福岡クラブが解散しました。1980年になって、福岡に新クラブ設立が図られましたが、福岡クラブと名乗ることが出来ず、福岡中央クラブとなった例があります。

現在、国際協会に登録されている横浜クラブの加盟年月日は、1930年12月15日です。

『HISTORY OF YSDOM』(1972年)のクラブリストには横浜クラブの加盟は、1930年12月15日と記されています。本文では、1947年に新規加入したクラブとして、他のクラブとともに横浜クラブを挙げていますが、これは日本区からの原稿によると考えられます。

横浜クラブ側にも不可解はあります。

1954年の日本区名簿には、クラブの加盟年月は記していませんが、名簿は加盟順になっていて、横浜クラブは、戦後の加盟とみなされ13番目です。1960年度版になって、加盟年月日が1930年12月15日と記されています。前出『横浜ワイズメンクラブ40年史』には、「1949年11月18日に再チャーター」(式典か?)、1960年に「クラブ創立30周年」という矛盾する記載があります。その後も1930年を起点とした周年行事を行っています。

戦後に制作したとみられる横浜クラブのバナーに加盟年が記されていないのです。

戦後の再開について記した一次資料は、奈良傳が記した2つの文しかありません。ひとつは、前記の『横浜クラブ40年史』の祝辞の「改めて加盟を申し込み・・・2度目の加入をしたわけである」というものです。もうひとつは、『日本のワイズメン運動小史<戦後の歩み>』(1966年)にある「11月3日に旧横浜クラブが再登録をおわり、」というものです。ここでは、大阪・神戸・東京クラブを「再建組」、戦後生まれたクラブを「加盟」、横浜クラブを「再登録」と表現を違えています。

戦後の横浜クラブの国際加盟認証状は、残され

ていません。(1950年3月に横浜クラブに転入会した高杉治興さんは、今回の調査で、「認証状はなかった」といわれています。新しいメンバー名簿を国際に送り、国際本部も受理したのでありますが、国際にも日本にも、そのことに関する客観的な事実が残っていないのです。

## 伝統を引き継ぐひとつのクラブ

それなら、横浜クラブは、戦前と戦後の2クラブがあるのでしょうか。結論から言いますと、かつては、国内ではふたつに見えたこともありましたが、今は、ひとつだと考えています。

クラブは、国際協会に加盟しているのですから、加盟について、自分たちがどうすることもできません。国際協会の判断が絶対です。

今回、横浜クラブの記念例会の前に、国際事務所に問い合わせました。すぐに西村隆夫書記長からメールが届きました。「プレゼンテーションデータは、なんと、80年前の来週15日でした」。

しかも、当事者である横浜クラブが、1950年以来60年、起点を1930年としているのです。戦前の歴史を受け継いだ、ひとつのクラブとみるのが妥当だと思います。

## その筋書

その道のりは、あくまで私の推論ですが、次のように描いています。

戦後、横浜クラブの再建は海老澤廉総主事が中心となって進められたことでしょう。横浜の財界人も加わりましたが、戦前のメンバーは集まりませんでした。一人も連絡がとれなかったのか、何人かは連絡がとれたのかも分かりません。いろいろなやり取りがあったのかも知れません。

戦前のクラブを引きずっていても、いつまで経ってもクラブはできない、また、前の住人がいない家に、居抜きで入居する居心地の悪さもあったのかもしれない。どうせなら、新しくクラブを立ち上げようという思いだったのでしょうか。最初は反対だった奈良傳も理解して、新会員の名簿を

付して加盟を申し込んだのでしょうか。

クラブと日本区は、当然、新加盟だと思っていたところでしょう。

ところが、国際の対応は違い、戦前のクラブが継続していると判断したのではないのでしょうか。

やがて、時代が落ち着いてきて、国際の情報も幅広く入るようになりました。『HISTORY OF Y'SDOM』(1953年)のクラブリストによって、国際においては、横浜クラブの歴史が1930年から続いていることを知ることになります。

1960年に次のことが起こっています。区名簿の加盟年が、1930年となったこと、横浜クラブが創立30周年を祝っていること。1966年発行の『日本のワイズメン運動小史<戦後の歩み>』の「日本区内クラブ一覧表には、横浜クラブのチャーターは、1930年、3番目と記されました。

どういう判断があったか、分かりませんが、横浜クラブも区も、国際本部に従って、歴史を引き継ごうということになったのでしょうか。

戦後作られたであろうクラブバナーに加盟年月日が記されていないこと、奈良の「旧横浜クラブの再登録をおわり」という言葉にも、歴史を捨て切れぬものを感じます。

今回、横浜クラブが編纂した『創立80周年記念誌』の第1頁には、1930年の認証状の写真が飾られています。

## 関連のことども

今回、書かせていただいた中で、文の流れなどから説明を省いたところがあります。話の本筋ではありませんが、言葉足らずのため誤解があってははいけませんので、少し、解説を加えさせていただきます。

1946年ブラッドフォード国際大会で、日本の国際復帰を提案した中国区馮(または憑)理事とその代理で大会に出席した李代表について、日本ワイズメン運動小史(奈良傳1966年)は、フルネームを記していません。李代表については、同大会の参加者名簿があれば判明するでしょう。

『HISTORY OF YSDOM』(1953年)によれば、1942-1948年の中国区理事は Maj. Gen. (少将) J. I Haung, Chungking とあります。また 1948年の戦後初の日本区大会(大阪)で、「国際協復帰のメッセージ」と「在南京のファン少将に感謝状を贈ることを決めています。感謝状は国際復帰の謝辞とも考えられます。この3者が同一人物だとすれば、1件落着です。しかし、1948年のロングビーチの参加者名簿には、Major Gen.(少将) J. N Haung, Nanking(黄仁霖)とあり、感謝状はこの人物に贈られた可能性があります。Maj. Gen. J. I Haung, Chungking と Major Gen. J. N Haung, Nanking(黄仁霖)は、同一人物とみることもできます。となると、馮区理事とは、誰? 馮を Haung とは読まないそうです。戦時中を北京で過ごし、あるいは前後に面識があるとも考えられる奈良傳さんが、黄と馮(または憑)を間違えるとは思えないのです。いまだに謎です

日本区の国際復帰に一役買ってくれたバークストロームと国際書記長のグライムズは、どういう間柄だったのでしょうか。兵役で韓国にいる人間に、休暇をとって、隣国の日本を訪問してくれと頼む方も頼む方ですが、それを受ける方もなかなかのものです。これを現在の状況を想定して、考えるとき、その熱さとフットワークに驚かされるばかりです。

横浜クラブの設立前、関東大震災で、横浜 YMCA 会館が焼失したとき、ただちに建築家のウィリアム・メレル・ヴォーリス(William Merrell Vories)が訪ね、「基礎は生かして再建できる」と助言していました。彼は、近江八幡 YMCA の創立者でワイズの理解者でした。横浜 YMCA はこの助言に従ったそうです。建築家として災害地に学ぶことは多いのですが、このフットワークは見事です。

横浜 YMCA の活動は、1884年に始まります。関内の YMCA 会館は、1915年に建築されたのが

初代、1923年の関東大震災で被災し、1934年に2代目が竣工。太平洋戦争後の米軍接收解除を経て、1975年に横浜国際青少年センターとして落成したのが、現在の第3代目会館です。

太平洋戦争後、1947年7月に開催された世界 YMCA 大会に、日本は代表を選考していましたが、参加が認められませんでした。その幻の代表の一人が奈良信さん(東京山手)でした。25歳。悔しい思いをしたそうです。

後に、奈良信さんが、日本区理事、国際議員を務めた時に、韓国のオーム(Joseph Ohm)区理事(後に国際会長)と親しくなり、彼がやはりオスロ大会の韓国代表だったことを知りました。その頃の国際役員には、この大会の代表だった人が何人もいたそうです。この若い日の出会いと友情が、20数年後の国際憲法の改定、国際本部を米国からジュネーブへ移転させるという歴史的な大変革を円滑に行うことを可能とした、大きな力となったことでしょう。

## あとがき

クラブは、周年を記念して、新クラブを設立することが多いので、しかも5年刻みで誕生祝いをするクラブもありますから、2011年も周年行事が目白押しです。それぞれ、刻んだ年月を思いつつ、決意を新たに作る時となるのでしょうか。

ジョージ・W・カイトル(George・W・Keitel)は、『HISTORY OF YSDOM(1972年)』の前書きを1971年フレスノ国際大会で述べたジェリー・ヘイル(Jerry Heyl)の言葉で結んでいます。「Hats off to the past-coats off to the future」

歴史上の人物につきましては、敬称を省略させていただきます。) )